

# ～『越後戊辰戦争と加茂軍議』の書評が 2/19 付けの新潟日報に掲載されました～

稲川 明雄著

## 越後戊辰戦争と加茂軍議

著者はかつて、長岡市立図書館「互尊文庫」の司書を務めていた。当時から、大学の研究者や歴史小説家の史料照会に応ずる機会が少なからずあったという。

「学者や作家の先生方というのは、自らの史観の枠組みに収まる史料を求めている。だから、その枠に収まらない、郷土を生きる人々の矜持や、先人たちの高い志が、活字になるなんてことはめったにないんだ」  
うずたかく積まれた歴史資料越しに、無念の思いを込めて、そう語る著者がいた。

「ならば、稲川さん。あなたが自分で書いたらいー」  
互尊文庫の手狭な事務室の片隅で、そんな話を交わしてから早や30年になる。

### にいがたの一冊

後に刊行された処女作「長岡城燃ゆ」以来、著書は優に10冊を超える。しかし、歴史作家としてのスタンスは一貫して揺るがない。

こういふ著者だからこそ、加茂商工会議所が白羽の矢を立てたのだろう。そうして成ったのが本書である。

3章（加茂の勤皇、加茂軍議、討薩ノ檄と長岡城奪還）からなる本書は、新聞連載小説を模してか、一話完結の小編をつないでゆく。



### 戦いの変遷 地政学的に分析

前回までのあらずじ風のめ、この力の空白に敏感であり、サービスもあり、ピギナーだった。懸念の謀報活動が越にも優しい。が、内容は極め後決戦を呼び寄せる加茂勤て骨太だ。郷土史通の読者皇党の活躍を追う第1章。諸氏にとっても、本書は歯 第2章、加茂軍議では、当こたえのある一冊である。 初は盟主不在の多国籍軍で

150年前、越後を戦渦 ある列藩同盟軍が、協同戦に巻き込んだ戊辰戦争と線の展開に向けて、短時日は、いったい何であったか。のうちに全軍の意思を統一現代の国際政治や世界各地の紛争を読み解く鍵として、地政学の考え方があ。 第3章では、乾坤一擲のある地域のパワーバランスを、討薩ノ檄として掲げたが崩れ、統治権力に空白が生じたとき、周囲の力がその空白（真空状態）を埋めるように働くというのだ。

本書では、加茂町を中心か、雲井龍雄か。私には越後に孫子の兵法などを援用の小京都と称される加茂のし、地政学的な分析が試み町そのものが主人公に思えられていて大変興味深い。 た。

徳川幕府の政奉還によ (長岡市開府400年記 念事業準備室長)  
品田 満  
新新潟日報事業社・16  
20円

書籍「越後戊辰戦争と加茂軍議」は、加茂商工会議所窓口の他、市内の(有)川口書店(上町)、(有)番場堂書店(仲町)、(有)ニック加茂(千刈)、県内の各有名書店で販売しております。  
また、アマゾンからもお買い求めいただけます。